



プライバシー志向性と生育環境との関係

吉田, 圭吾

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 3(1):21-31

(Issue Date)

1995

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000199>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000199>



プライバシー志向性と生育環境との関係

吉 田 圭 吾

Relationships of Privacy Preference with the Growth Environment.

Keigo YOSHIDA

問題と目的

最近プライバシーの侵害や保護といった表現が日常的に使われるようになってきた。しかし、プライバシーに関する心理学的な研究は十分になされていないのが現状である。その原因としては、プライバシーという言葉そのものが被調査者に「触れてほしくない」という感情を喚起したり、プライバシーに関して研究することが「プライバシー侵害」となりやすいこと (Kelvin, 1973) に加えて、プライバシーという概念が、個人的な体験の水準と、社会的・文化的規範の水準の両方をもっているために問題が複雑になっている (Laufer&Wolfe, 1977) こと、などが挙げられる。

プライバシーとは、一般的には、個人的なことがらを公的な場で公表されたり「他人」に知られたくないという感情を意味している。しかし一方で、自分の住居や部屋といった物理的環境が確保されていることや、公にしたいくない個人的ことがら (秘密) を持つような傾向そのものを指すこともあり、概念が多義的なことも問題を困難にしている。

また、Laufer&Wolfe (1977) は、プライバシー及びプライバシー侵害という概念が与えられた状況についての体験に強く縛られていることを指摘している。プライバシーの体験は、具体的な状況を把握する意識の様式に密接に結びついており、このような意識の様式は、自分が属する特定の世界との個人的な交流から自然に発展してくる。プライバシー概念をめぐるこのような状況性は、必然的に、自分の所属する社会の歴史的伝統や科学技術の進歩の度合い、個人のエコロジカルなセッティング、個人のライフサイクルの段階、個人の自己の感覚、個人の対人関係の性質などの幅広い背景を反映しているのである。それらの全体的な様相が、与えられた状況に対してプライバシーが守られている感覚をもたらしたり、ある状況や出来事をプライバシー侵害として体験することに影響している。従って、社会一般ではプライバシー侵害に相当する体験とみなされている体験をしても、ある状況性においてはまったくプライバシーの意識を生じない場合もあり、逆に日常的な出来事の中で唐突にプライバシーの侵害体験がおそってくる場合もあるということになる。

このように考えると、プライバシー体験は社会が異なれば異なったものとなるであろうし、そもそも日本においてプライバシーを問題にすることがどのような意味をもつのかという疑問を生じさせることにもなる。日本人の集団性や、日本人の集団におけるあからさまな秘密の暴露は話題にされるこ

とが多いが、プライバシー概念が個人主義を前提としていることを考えると、本邦においてプライバシー研究がほとんどなされていないのも、一面では「プライバシー」を研究することに対する情緒的な抵抗が強いことが一因となっているであろう。

さて、Laufer&Wolfeは、このような状況性は、プライバシーが多次元的な構造をもっていることを示しており、その構造を理解することによって、プライバシー体験やプライバシー侵害体験に潜在する状況の型を予測することが可能であると述べている。その構造は、自己-自我次元 (self-ego dimension) ・環境的次元 (environmental dimension) ・対人的次元 (interpersonal dimension) の3つの次元からなる。

1) 自己-自我次元

個人が社会的及び物理的環境から分離し、個性をもつ人間に成長していく過程。自我の発達過程は、母親への依存状態から、成長するにつれて(心理学的及び物理的に)「ひとりでいること (aloneness)」を体験し、「自律的な自我」を形成していくことである。その「ひとりでいること」が自我の発達に及ぼす影響と、それが個人の自尊心や同一性の感覚に与える影響が、自己-自我の次元である。

2) 環境的次元

これには、文化的要素・社会物理的要素・ライフサイクル要素の3つがある。特定の文化の伝統によって伝達される慣行や規範がプライバシー体験に与える影響が文化的要素である。人間の行動を取り巻く環境的セッティングの生態学的・物理的特性が社会物理的要素であり、自分の部屋があるとか、家が周囲から見えにくい場所にあるとか、部屋の音がまわりに聞こえないなどの問題を含んでいる。さまざまな発達段階において、個人の欲求や能力、行動などの変化によって、プライバシー体験に与える影響がライフサイクル要素である。

3) 対人的次元

プライバシーは、「ひとりでいること」でもあるが、必ず他者の存在を前提としている。これには、情報管理と交流管理という2つの要素がある。他者との交流を一時的に停止したり制限することで、そのような管理を通して自分がひとりになりたくなったり交流を望んだりする条件を認識することが、交流管理である。個人的な情報を他者に開示したり開示しなかったりすることで、プライバシー体験を意識するのが情報管理の要素である。

Laufer&Wolfeは、このような多次元構造をプライバシー体験に仮定しながら、実証的な研究を十分に発展させていったとはいえない。それは、この理論があまりにも包括的な理論であり、さらにそのうえこれらの3次元が一つの現象においては重なり合っていると考えるために、問題をさらに複雑化させてしまったこと、どのような家を作れば快適な生活ができるかという彼らのいう社会的・文化的規範の水準に重みを置きすぎて、個人的な体験の水準から離れすぎてしまったことなどが理由であるように思われる。

一方、Marshall (1972) らは、Westin (1967) のプライバシーに関する理論に基づき、プライバシー志向性尺度を作成した。Westinは、プライバシーを、「いつ、どこで、どの程度自分の情報が他者に伝達されるかということについて自ら決定できる権利があるという、個人や集団の要求」と定義し、個人は、プライバシー欲求と、他者に自分自身のことを開示し伝達したいという欲求との均衡を、その時点の環境や社会の条件に照らしながら図るという個人的調節過程に従事していると考えた。そして、彼は、個人的プライバシー体験の4つの基本状態として、孤独 (solitude)、親密性 (intimacy)、匿名性 (anonymity)、慎み (reserve) を同定した。

Marshallは、質問紙調査を行い、因子分析によって、「孤独」「親密性」「閑居」「匿名性」「慎み」の5因子をプライバシー志向性の次元として抽出した。また、Pedersen (1979) は、これとは独立に、Altman (1975) のプライバシーの定義に基づき、やはりWestinの4つの基本状態を参考にして、質

問紙法の因子分析によって、「孤独」「慎み」「隔離」「匿名性」「友人との親密性」「家族との親密性」の6因子を抽出した。

彼らの「プライバシー志向性」に関する基本的な考え方は、以下のようになる。プライバシー体験は、状況や個人の欲求によって刻々と変化するので、個人はプライバシーを維持する様式を時と場合に応じて使い分けると考えられる。そして、個人に与えられた環境や個人の性格特性によって、個人はある時点において特定のプライバシーの様式をより好むであろう。そのプライバシー志向の裏側にある力動をそれに続いて理解する必要がある。

しかし、Pedersenは、その後の研究で、環境的次元を取り上げずに、他の性格特性との関連をみることに研究の重点をおいてしまっている。

本研究は、Laufer&Wolfeの理論に基づきながら、プライバシー志向性に影響を及ぼす主に環境的次元の諸要因を探索的に明らかにし、プライバシー志向の裏側にある力動を理解していく手がかりを見いだすことを目的とする。

方 法

被調査者

国立K大学の学生235名（男子118名、女子117名）

質問紙

(1) プライバシー志向性を測定する質問紙（吉田&溝上(1994)の作成した34項目のプライバシー志向性尺度；「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの7件法）「孤独」「友人との親密性」「慎み」「閑居」「隔離」「自由意志」「家族との親密性」の7因子からなる。

(2) 生育環境に関する質問紙。内容は、兄弟の数、兄弟の中での自分の順番、兄弟喧嘩をよくするほうか（「いつもしていた」から「まったくしなかった」までの6件法）、自分一人の部屋をもったことがあるかどうか、ひとりになりたいときにその部屋をだれも入ってこないようにできたかどうか、今までに下宿や寮などで一人暮らしをしたことがあるかどうか、あると答えた人にその一人暮らしに満足しているかどうか（「大変満足している」から「まったく満足していない」までの5件法）、ないと答えた人に一人暮らしをしてみたいかどうか（「ぜひしてみたい」から「まったくする気はない」までの5件法）、生まれ育った家を引っ越したことがあるかどうか、あると答えた人に引っ越しのおおよその総移動距離、及び引っ越し回数、生まれ育った故郷が都市地域か田舎地域か（4件法）の12の質問である。環境次元のうち、社会物理的要素に関するものは、都市部か田舎地域か、自分の部屋があるか、一人暮らしをしたことがあるか、引っ越しとその移動距離および引っ越し回数などである。自分の部屋でひとりになれたかどうか、一人暮らしに満足しているかどうか、および一人暮らしをしたいかどうかなどは、環境に対する個人の認知や評価に関する質問であるが、環境的次元は単なる物理空間ではなくそれが人間にとって果たす生態学的な側面を含んでいることや、ライフコース要素、あるいは自己-自我次元に微妙に絡んでいることから取り上げることにした。また、兄弟の数や兄弟内の順位などは、生育環境における重要なエコロジカルな要因であると考えられたので、兄弟関係に関する質問を付け加えた。

実施法および調査時期

上記の2種類の質問紙を冊子とし、授業時間を利用して集団的に実施した。回答所要時間は10～15分であった。調査時期は1994年6～10月であった。

結果の処理法

(1) プライバシー志向性尺度では、各項目ともプライバシー志向の程度が高いほど高得点となるようそれぞれ7～1点を付与し、各因子ごとに総得点を算出した。「自由意志」（4項目）以外は、すべて

TABLE 1 生育環境各要因の男女別度数

生育環境要因	水準	男性 (%)	女性 (%)
CIRU	都会地域群	62 (52.5)	48 (41.7)
	田舎地域群	56 (47.5)	67 (58.3)
ALONE	孤独体験群	32 (32.0)	32 (31.7)
	孤独体験少群	68 (68.0)	69 (68.3)
BROS	二人以内群	72 (61.0)	75 (64.1)
	三人以上群	46 (39.0)	42 (35.9)
BROJ	長男長女群	54 (45.8)	66 (56.4)
	二番目以降群	64 (54.2)	51 (43.6)
BROF	喧嘩多群	53 (49.5)	56 (51.9)
	喧嘩少群	54 (50.5)	52 (48.1)
LIVE	一人暮らし群	67 (56.8)	53 (45.7)
	家族と同居群	51 (43.2)	63 (54.3)
LSAT	満足群	17 (25.4)	16 (29.6)
	中満足群	40 (59.7)	31 (57.4)
	低満足群	10 (14.9)	7 (13.0)
HLIVE	願望群	24 (47.1)	28 (44.4)
	中願望群	10 (19.6)	17 (27.0)
	低願望群	17 (33.3)	18 (28.6)
MOVE	転居群	69 (58.5)	80 (68.4)
	非転居群	49 (41.5)	37 (31.6)
MLEN	長距離群	38 (55.1)	38 (47.5)
	短距離群	31 (44.9)	42 (52.5)
MNUM	転居一回群	32 (46.4)	33 (41.3)
	転居複数群	37 (53.6)	47 (58.8)

「家族同居群」として分析した。一人暮らしをしている人について（以下HLIVEと表記）、「大変満足している」と答えた被調査者を「満足群」、「だいたい満足している」と答えた者を「中満足群」、それ以外を「低満足群」とした。一人暮らししていない人（以下LSATと表記）について、「ぜひしてみたい」「ときどきしてみたいなと思う」と答えた被調査者をそれぞれ「願望群」「中願望群」、それ以外を「低願望群」として分析した。引っ越し（以下MOVEと表記）に関しては、引っ越しありを「転居群」、なしを「非転居群」とした。引っ越し総移動距離（以下MLENと表記）に関して、総移動距離20km以下を「短距離群」、それより長い者は「長距離群」とした。最後に引っ越し回数（以下MNUMと表記）は、引っ越し一回の人を「転居一回群」、それ以上を「転居複数群」とした。

結果と考察

1. 生育環境各要因の男女別度数について

生育環境各要因の男女別度数はTABLE 1 に示した。要因間の独立性を調べるために、2 要因ごとに男女別にクロス集計し、独立性の検定を行った。その結果、男女のCIRU-LIVE間、女性のCIRU-MOVE間、女性のLIVE-ALONE間に有意な連関がみられた。CIRU-LIVE間は、男性では1%水準で($\chi^2=20.6$, D. F. =1) 有意な連関、女性でも1%水準で($\chi^2=11.5$, D. F. =1) 有意な連関がみられた(TABLE 2)。残差分析の結果、男女とも都市地域の被調査者は家族と同居の傾向(Adres. =4.5, $p<.01$)、田舎地域の人是一人暮らしの傾向(Adres. =4.5, $p<.01$)がある。この結果は、K大学が都市型の大学のため、田舎地域の人下宿をしないと通学できない事情を反映している。また、女性において、CIRU-MOVE間に5%水準で(χ^2

5 項目である。

(2) 生育環境質問紙については以下のようにした。故郷が都市地域か田舎地域か（以下CIRUと表記）は、「都市部」「どちらかといえば都市部」と答えた被調査者を「都市地域群」、「田舎の地域」「どちらかといえば田舎の地域」と答えた被調査者を「田舎地域群」とした。自分の部屋を持っていた被調査者は201名(85.5%)であったため分析から除き、自分の部屋でひとり（以下ALONEと表記）になった被調査者を「孤独体験群」、なれなかった被調査者を「孤独体験少群」とした。兄弟数（以下BROSと表記）については、自分を含めて2人以内の場合を「二人以内群」、それ以上を「三人以上群」として分析した。兄弟内の順番（以下BROJと表記）は、第一子を「長男長女群」（この中には20名(16.7%)の一人っ子が含まれる）、それ以外を「二番目以降群」とした。兄弟喧嘩（以下BROFと表記）については、「いつもしていた」「しばしばしていた」と答えた者を「喧嘩多群」、それ以外を「喧嘩少群」とした。一人暮らし（以下LIVEと表記）については、一人暮らしの体験のある者を「一人暮らし群」、ないものを

=6.04, D. F. =1) 有意な連関がみられた (TABLE 3)。残差分析の結果、都市地域の人より引っ越しを体験した人が田舎地域の人よりも有意に (Adres. =2.5, $p < .05$) 多いことがわかった。男性においても同様の有意傾向 ($\chi^2 = 3.15$, D. F. =1, $p < .10$) がみられた。また、女性においてALONE-LIVE間に5%水準 ($\chi^2 = 4.54$, D. F. =1) の有意な連関がみられた (TABLE 4)。残差分析の結果、自分の部屋でひとりになった人は、一人暮らしの経験がある (Adres. =2.1, $p < .05$) という結果になった。いずれにせよ、これらの要因に関する分散分析結果にこれら要因間の連関が関わっている可能性があることを考える必要がある。

2. プライバシー志向性尺度について

プライバシー志向性における性差を調べるために、尺度の各因子の平均値の男女差をt検定で分析したところ、どの下位尺度においても有意な差がなく、「隔離」($t = 1.90$, D. F. =233, $p < .10$) と「自由意志」($t = 1.84$, D. F. =233, $p < .10$) に有意傾向 (男性 > 女性) がみられるにとどまった (FIG. 1)。プライバシー志向性の諸次元には性差があまりないと判断できる。

3. プライバシー志向性と生育環境各要因との関係

生育環境の各要因が、プライバシー志向性の各因子にどのように関係しているかを探索的に調べるため、各要因ごとに、性別との2要因分散分析を行った。その結果、11の要因中9つの要因で、有意な結果が得られた (TABLE 5)。

まず、ALONEについて、「友人との親密性」尺度において主効果 ($F = 3.80$, D. F. =1/197, $p < .10$) (有意傾向) がみられ、孤独体験群が孤独体験少群より「友人との親密性」が高かった。自分の部屋でひとりの体験がもてた者は、男女に関わらず友人と親密になることでプライバシーの体験が得られている

TABLE 2 CIRU-LIVE間のクロス集計表

CIRU	LIVE			
	男性		女性	
	一人暮らし	家族と同居	一人暮らし	家族と同居
都市地域	23 (37.1)	39 (62.9)	13 (27.1)	35 (72.9)
田舎地域	44 (78.6)	22 (21.4)	39 (59.1)	27 (40.9)

TABLE 3 CIRU-MOVE間のクロス集計表

CIRU	MOVE			
	男性		女性	
	転居一回	転居複数	転居一回	転居複数
都市地域	41 (66.1)	21 (33.9)	39 (81.3)	9 (18.8)
田舎地域	28 (50.0)	28 (50.0)	40 (59.7)	27 (40.3)

TABLE 4 LIVE-ALONE間のクロス集計表

LIVE	ALONE			
	男性		女性	
	孤独体験	孤独体験少	孤独体験	孤独体験少
一人暮らし	17 (27.4)	45 (72.6)	20 (42.6)	27 (57.4)
家族と同居	15 (39.5)	23 (60.5)	12 (22.6)	41 (77.4)

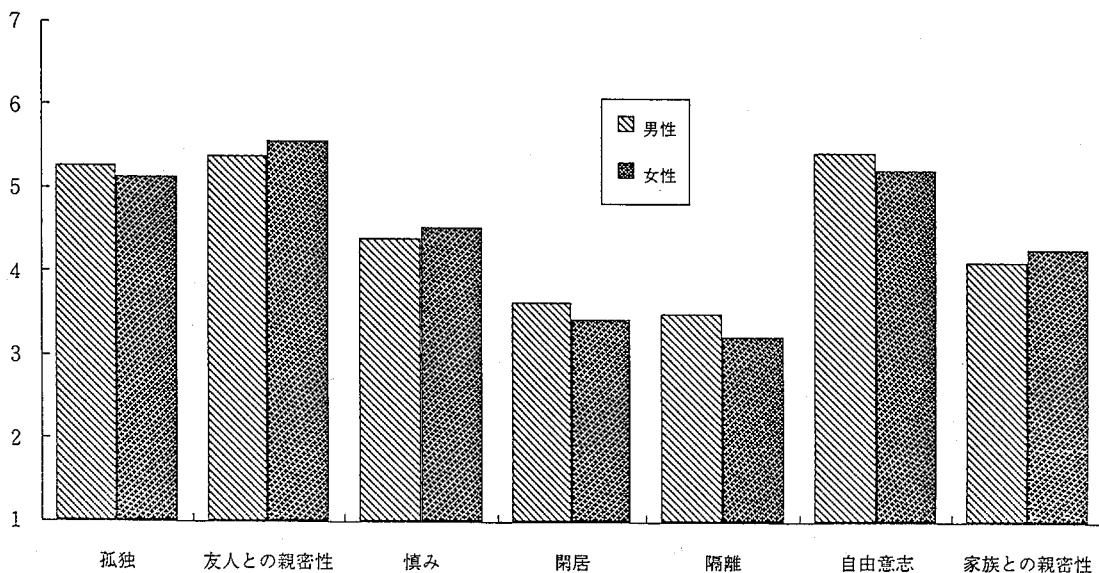


FIG. 1 プライバシー志向性各尺度の男女別項目平均値

TABLE 5. 各変数の二要因分散分析で主効果の得られた生育環境要因の要因別平均値						
生育環境要因	水準	平均値 (標準偏差)	自由度	F 値	確率	多重比較の結果
「孤独」尺度						
H L I V E	願望群	27.2 (5.41)	2/108	4.28	*	願望群>中願望群* 願望群>低願望群*
	中願望群	23.9 (6.23)				
	低願望群	24.3 (5.17)				
「友人との親密性」尺度						
A L O N E	孤独体験群	28.1 (3.59)	1/197	3.80	+	
	孤独体験少群	26.8 (4.68)				
「慎み」尺度						
M N U M	転居一回群	21.2 (5.89)	1/145	6.98	**	
	転居複数群	23.3 (4.78)				
L S A T	満足群	20.1 (5.63)	2/115	3.60	*	満足群<中満足群* 満足群<低満足群*
	中満足群	22.9 (5.22)				
	低満足群	23.3 (5.42)				
「自由意志」尺度						
M L E N	長距離群	20.7 (3.56)	1/145	5.33	*	
	短距離群	21.9 (3.35)				
H L I V E	願望群	22.3 (2.95)	2/108	4.31	*	願望群>中願望群*
	中願望群	19.9 (4.48)				
	低願望群	20.8 (3.62)				
「家族との親密性」尺度						
B R O J	長男長女群	21.6 (3.98)	2/231	6.58	*	
	二番目以降群	20.2 (4.10)				
L I V E	一人暮らし群	21.5 (3.95)	1/230	6.47	*	
	家族と同居群	20.3 (4.15)				

注) +: $p < .10$, *: $p < .05$, **: $p < .01$

作用が有意であった。まず、「閑居」において5%水準で交互作用が有意 ($F=6.48$, D. F. =1/229, $P < .05$) であった。(FIG. 2) 特に、女性において「田舎地域群」より「都市地域群」の方が有意 ($F=5.35$, D. F. =1/229, $p < .05$) に「閑居」が高く、「都市地域群」において男性の方が女性より有意 ($F=8.71$, D. F. =1/229, $p < .01$) に「閑居」が高かった。「閑居」とは、「孤独」がひとりになれることに重点を置いているのに対して、より他人から離れて邪魔されないことを強調したプライバシー状態を示している。CIRUとLIVEとの連関の強い結果から、都市地域の学生は家族と同居していることが多い。今回の結果が都市地域の女性に有意に低いことを示していることから考えると、おそらくはK大学の近隣から通学する女子学生は、「閑居」のプライバシーを志向していないからこそK大学を選んだと予想することも可能である。また、CIRUは「自由意志」においても有意な ($F=4.41$, D. F. =1/229, $p < .05$) 交互作用が

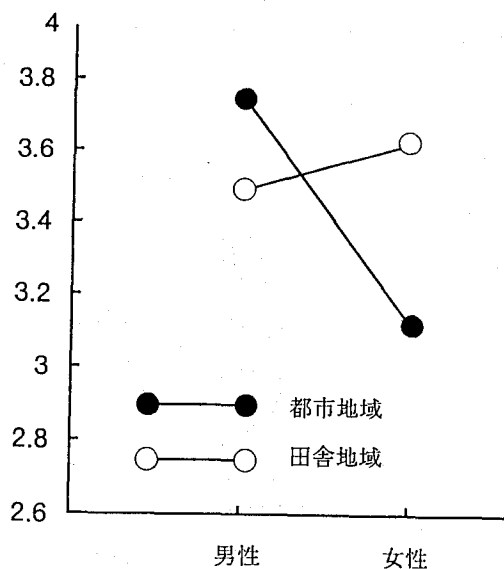


FIG. 2 「閑居」のCIRU別項目平均値

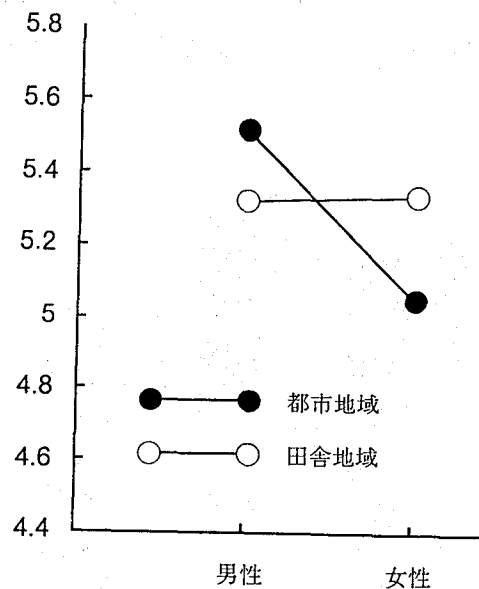


FIG. 3 「自由意志」のCIRU別項目平均値

ことになる。自分の部屋でひとりになれることは、一方で両親との分離が進展していることを表しており、親の価値観から離れて自分の価値観を模索しはじめている可能性がある。思春期に孤独をしっかりと体験した者の方が友人と親密になりやすいかどうかは、今後研究の余地があるであろう。

次に、CIRUについて、「閑居」「自由意志」「家族との親密性」のそれぞれにおいて交互

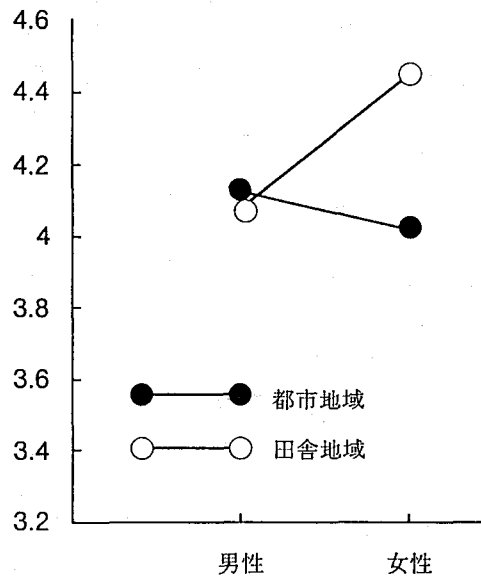


FIG. 4 「家族との親密性」のCIRU別項目平均値

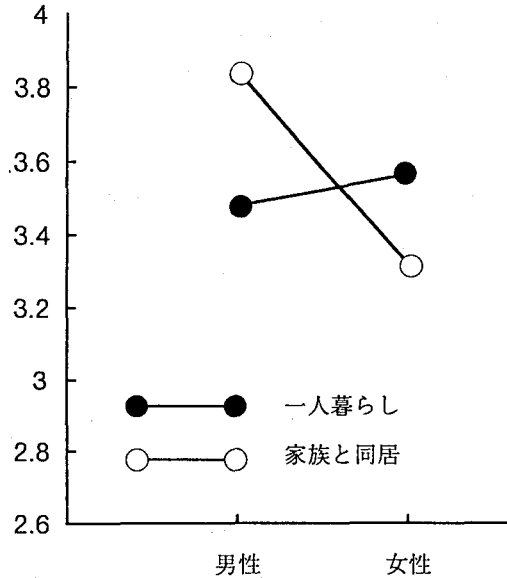


FIG. 5 「閑居」のLIVE別項目平均値

得られ (FIG. 3)、女性においては「田舎地域」出身の方が「都市地域」出身より「自由意志」が高く ($F=3.30, p<.10$)、「都市地域」においては男性が女性より「自由意志」が高いこと ($F=8.15, p<.01$) が示された。女性においては、田舎の周囲の「女性は近くの大学でいい」という圧力に対抗して都市部の大学に入学するのはもともと「自由意志」が高かったことが考えられる。それに対して、「都市地域」の女性の「自由意志」は低い。さらに、「家族との親密性」において有意な ($F=6.75, D.F.=1/229, p<.01$) 交互作用がえられた (FIG. 4)。女性において「田舎地域群」は「都市地域群」より「家族との親密性」は高く ($F=6.78, p<.05$)、「田舎地域」において女性が男性より高い ($F=5.34, p<.05$)。次に述べるように、LIVEについては「家族との親密性」において主効果が有意となっており、「一人暮らし群」が「家族と同居群」より「家族との親密性」が高い。女性の「田舎地域群」で「家族との親密性」が高いのはその影響がかなり含まれているように思われる。しかし「一人暮らし群」の方が「家族との親密性」が高いという結果は、今後の研究が必要である。家族と離れてみて初めて家族のありがたみがわかるということなのか、「家族との親密性」が基盤にあって初めて「一人暮らし」が可能となるのか、今の時点では判断しにくい。

次に、LIVEについて、「閑居」において交互作用 ($F=4.28, D.F.=1/230, p<.05$) が (FIG. 5)、また、すでに述べたように「家族との親密性」において主効果が有意 ($F=6.47, p<.05$) となった。「閑居」における交互作用はCIRUの結果と対応しているが、ここでは男性において「一人暮らし群」が「家族と同居群」より「閑居」が高く、特に「家族と同居群」において、女性より男性が有意に ($F=8.09, p<.01$) 高いという結果になった。CIRUでは「都市地域」の女性が「閑居」が低かったのに比べて、LIVEでは「家族と同居群」の男性が「閑居」が高い。よって、同じ「閑居」というプライバシー志向が環境要因によって男女で異なる意味を持つことがわかる。男性にとって「閑居」とは家族との同居から逃れ、誰にも邪魔されない他人から離れた自分の空間を獲得することを示していると判断できるのに対して、女性にとっては「都市地域」において「閑居」が低いというように負の意味を持っているのである。

続いて、LSATについては、「慎み」において有意 ($F=3.60, D.F.=2/115, p<.05$) な主効果が得られ、LSD法による多重比較の結果、「満足群」<「中満足群」、「満足群」<「低満足群」 ($MSe=28.06, p<.05$) となった。「慎み」とは、対人関係において本当に親しくなるまでは自分にあまり干渉してほし

くないと望むようなプライバシー志向を表している。一人暮らしに満足している人は十分他のプライバシー志向に頼ることができるが、満足していない人は「慎み」のようなプライバシー志向を必要としているのかも知れない。

HLIVEについては、まず「孤独」において主効果 ($F=4.28$, D. F. =2/108, $p<.05$) が得られ、LSD法による多重比較の結果、「願望群」>「中願望群」、「願望群」>「低願望群」 ($MSe=30.77$, $P<.05$) となった。また、「閑居」で有意な ($F=3.34$, D. F. =2/108, $P<.05$) 交互作用が得られ、男性においてはHLIVEの3群間に有意な ($F=3/25$, $p<.05$) 差があり、LSD法による多重比較の結果、「中願望群」>「低願望群」 ($MSe=28.53$, $p<.05$) となった。そして、「中願望群」において男性が女性よりも高い ($F=11.86$, $p<.01$)。女性ではあまり差が得られなかったのに対して、男性は、「中願望群」「願望群」は「閑居」が高い。この結果からも、女性が一人暮らしに求めているのは、他人から離れた邪魔されないプライバシー空間ではなく、むしろ男性がそのプライバシー空間を求めているのではないかと考えられた。また、HLIVEは、「自由意志」においても主効果 ($F=4.31$, D. F. =2/108, $p<.05$) があり、LSD法による多重比較の結果、「願望群」>「中願望群」 ($MSe=12.26$, $p<.05$) となった。その結果、男女に関わらず、一人暮らしを望んでいる人は、「自由意志」が高いという結果が得られた。このように、一人暮らしを望んでいる人は、自分一人になれてくつろげる空間という状態と、自分の意志で自由に行動したいという状態のプライバシー志向をしている。そして、男性はさらにそれに加えて家族や友人からも距離的に離れた誰にも邪魔されない空間を望んでいることがわかる。

続いて、今までの生育歴における転居の問題を論じる。MOVEについて、「家族との親密性」において有意な ($F=5.89$, D. F. =1/231, $P<.05$) 交互作用が得られた。男性においては「転居群」が「非転居群」より「家族との親密性」が高く ($F=3.01$, $p<.10$)、「非転居群」において女性は男性より「家族との親密性」が高い ($F=8.00$, $P<.01$)。転居体験そのものにはさまざまな要因が加わっているので解釈は難しいが、引っ越し経験のない男性は「家族との親密性」というプライバシー志向に頼らない傾向がある。

MLENについて、「自由意志」において有意な ($F=5.33$, D. F. =1/145, $P<.05$) 主効果がみられる (TABLE 5)。引っ越しが短距離の方が長距離群より「自由意志」が高い。また、MNUMについて、「慎み」において有意な ($F=6.98$, D. F. =1/145, $p<.01$) 主効果がみられる。「転居複数群」が「転居一回群」より

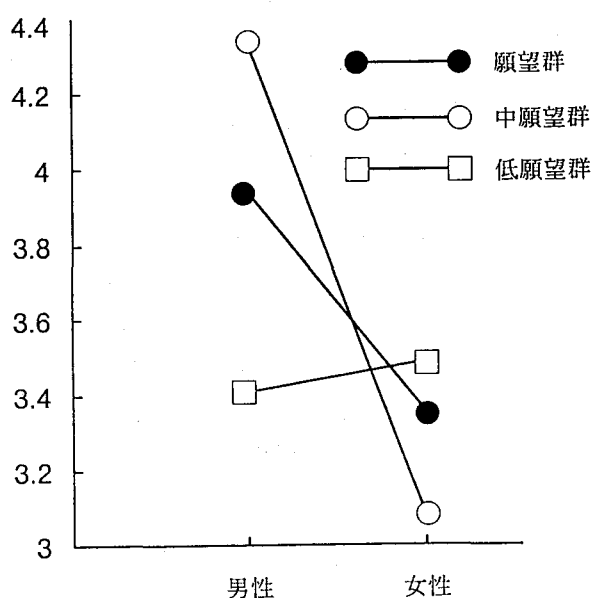


FIG. 6 「閑居」のHLIVE別項目平均値

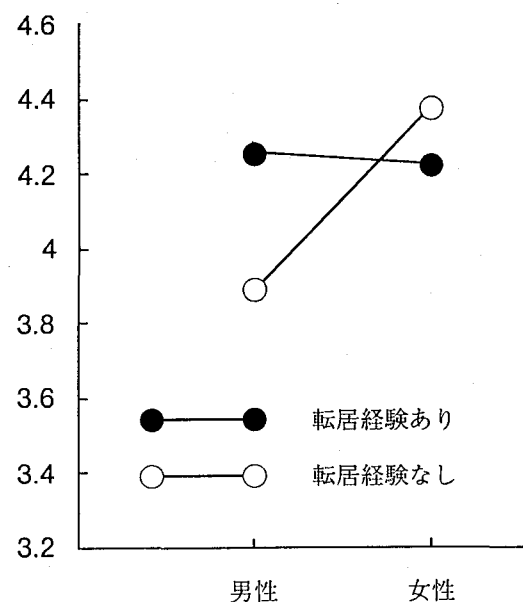


FIG. 7 「家族との親密性」のMOVE別項目平均値

「慎み」が少ない。

引っ越しが長距離に及び、何度も転居すればするほど、親密な友人との別れを経験せざるを得ず、また何度も転居するような場合、自分の家や部屋がプライバシー空間として安定することが難しくなると思われる。そのような場合、見知らぬ土地で見知らぬ人にあれこれと探られたくないというプライバシー志向を持つことは十分考えられる。その意味で、長距離の転居が多いことは、対人関係において個人に不利益をもたらすだけでなく、プライバシー体験においても重大な問題を生じると判断しうる。

最後に兄弟関係について考察する。生育環境における生態学的な要因として兄弟関係に関する質問を加えてみたが、分析の結果有意な結果を得たのは、BROSについて「家族との親密性」($F=6.58, D.F.=2/231, p<.05$)のみであった。「長男長女群」は「二番目以降群」より「家族との親密性」が高い。これは、断定しにくいだが、親と子供双方における「長男長女」についての役割意識もあるだろうし、二番目以降は早めに家を出ることを考えるなど、家族との分離が早いことも影響しているであろう。しかし、BROS、BROSの2要因については有意な結果は得られなかった。これは両要因がプライバシー志向性とは関係が少ないことを示しているとも考えられるが、一方、兄弟関係は環境的次元と考えるよりは、Laufer&Wolfeのいう対人的次元における交流管理の要因とみなした方がよいのかもしれない。それは兄弟関係の問題が、兄弟の数や順番などに依存するのではなく、それぞれの兄弟の性格や兄弟同士の相互作用の効果の方が大きいと思われるからである。ある特定の性格をもつ兄弟との親和欲求や対立関係が、その後の個人の対人関係に影響を与え、それがその個人の対人関係における交流管理や情報管理を規定しているのである。今後そのような立場に立脚した研究をする必要があると思われる。

4. プライバシー志向性の各因子について

これまでの結果を、各因子ごとに考察する。

「孤独」因子は、HLIVEのみで有意な主効果が得られた。プライバシーにおける孤独志向は家族と同居している被調査者のうち一人暮らしをしたい人にみられる。一人暮らし願望は物理環境的要因ではなく、物理的あるいは社会的環境に対する個人の認知を含んでいる。すなわち、一人暮らし願望とは、社会物理的環境としては家族と同居している人が、家族との同居に何らかの不満を抱えていて、そこから脱出したいという願望を示しているように思われる。そのような人は、家族との同居を保つと同時に家庭内での一人暮らしを疑似的に作り出したいために「自分の部屋でひとりきりになって安らぐ」という「孤独」志向をもつのではないかと思われる。

続いて、「友人との親密性」はALONEのみで主効果（有意傾向）が得られた。プライバシーにおける友人との親密性志向は、自分の部屋でひとりになりたい時に誰にも入ってこれないようにできた人にみられる。この「友人との親密性」因子は「自分のことなら何でも話せる人とお互いを共有し合う」ことで達成されるプライバシー状態を意味している。自分の部屋に例えば鍵を掛けることができるということが個人にとってどういう意味を持っていたのかは不明である。そのような体験が「孤独」因子ではなく「友人との親密性」因子と関係があるのは興味深い。自分の部屋に鍵を掛けれるということが日本人の思春期の子どもにとってどのような意味を持つのであろうか。へたをすると過度の孤独体験をもたらす、むしろプライバシー志向としては「友人との親密性」を志向するのであろうか。この点も今後の研究が必要である。

「慎み」はMNUMとLSATにおいて有意な主効果が得られた。「慎み」とは、本当に親しくならないうちは他人にあまり自分を出したくないという状態を表している。このようなプライバシーを志向するのは、転居を繰り返したり、一人暮らしに満足していない人に多い。「慎み」とは、物理的空間ではなく、ある心理的空間を自己のまわりに形成し、そのなかで守られた状態を意味している。プライバ

シーの物理的空間が得られなかったり、得られても満足のいくものでなかったりした場合は、「慎み」のように、物理的空間に代替するような心理的空間に頼らざるを得ないのかもしれない。

「閑居」は、性とCIRUとLIVE、HLIVEとの有意な交互作用が得られた。CIRUはLIVEと連関がある要因なので、一方に交互作用がでると他方にもやすい。しかし、CIRUとLIVEの分散分析の結果は異なっている。CIRUにおいては、「都市地域」の女性の「閑居」志向が低いという結果だったのに対し、LIVEにおいては、「家族と同居」の男性の「閑居」志向が高いという結果になった。「閑居」は、心理的空間や自分の部屋という空間をもっと広げて居住空間全体が、周辺環境との関係においてプライバシーが確保される必要があるということを示している。「都市地域」においては「閑居」のような状態はよほどのことがないかぎり満たされることは少ない。それで「都市地域」の女性は「閑居」志向のプライバシー確保に頼らないことを結果は表している。男性は、たとえ自分の部屋があったとしても「家族と同居」そのものから逃れたいという傾向が強く、一人暮らしを含む、より広い居住空間的プライバシーを必要としているのかもしれない。それは、HLIVEの交互作用がさらに証拠立てている。一人暮らしをしていない男性は、一人暮らしを望んでいる場合、「閑居」志向がかなり高いのである。それに対して女性が一人暮らしに求めているプライバシー状態はより幅が広いために結果として現れなかったかもしれない。

「隔離」因子についてはどのような結果も得られなかった。それ以外のプライバシー志向性が、多かれ少なかれ自分のまわりに何らかの空間を形成することでプライバシー状態を作り出しているのに対して、「隔離」は自分の方が自然に溶け込むことによってプライバシー状態を作り出す方法であり、生育環境のみでは説明することができないのであろうか。「隔離」志向についても、今後の研究が必要である。

「自由意志」は、性とCIRUとの有意な交互作用、MLENとHLIVEで有意な主効果が得られた。「自由意志」は、「誰にも気兼ねすることなく、自由に行動することができるという意識をもつ」でプライバシー状態を作り出すことである。CIRUとの交互作用は、田舎地域から都市地域の大学に入学する女性の「自由意志」が高いことを示しているように思われる。また、引っ越しの総距離が長い人は「自由意志」が低く、一人暮らしを望んでいる人は「自由意志」が高い。

「家族との親密性」は、BROJとLIVEで有意な主効果、性とCIRU、MOVEとの有意な交互作用が得られた。これらの結果はすでに述べたようにそれぞれ解釈が難しいが、どれも社会物理的環境の要素であり、プライバシー志向性の因子のうち、環境的次元が最も影響しているのが、「家族との親密性」かもしれない。

5. 総合的考察

ここまで考察してきたように、各環境要因がプライバシー志向性の諸因子とある程度の関係にあることがわかった。特にいくつかの交互作用が有意であったことから、男性と女性では、生育環境がプライバシー志向性に及ぼす影響は異なることが示唆された。プライバシー志向性の各因子の得点自体に男女差はなかったが、今後もプライバシー体験の男女差については論じていく必要がある。

ただ、どの程度満足なプライバシー環境を被調査者が持っているのかがわからなかったため、例えばあるプライバシー志向を持っていたとして、その人がそのプライバシー志向に満足しているのか、あるいはやむを得ずそのプライバシー状態を志向しているのかが判断できなかった。今後、プライバシーのいろいろな状態を調べるだけでなく、今現在の被調査者の知覚されたプライバシー (perceived privacy) についての自己評価を問題にしていく必要があるであろう。

また、今回は、定常的な物理的環境というよりは、引っ越しや一人暮らしなどの、物理的環境の変化が個人のプライバシー志向性に与える影響を主にみてきたように思う。プライバシー体験そのものが状況依存적であるので、プライバシーが意識されるのは、引っ越ししたり、突然誰かに個人的なこ

とを聞かれたり、何か自己の境界が脅かされたり、境界の変更を余儀なくされる時に、プライバシー、あるいはプライバシー侵害は意識される。そのようなプライバシー侵害の問題を研究計画に組み入れる方がよいであろう。

以上のことを踏まえながら、プライバシー現象を、自己・環境・交流という3つの視点からダイナミックに捉えていくことが今後は期待される。

引用文献

- Altman, I. (1975): The environment and social behaviour: privacy, personal space, territory, crowding. Books/Cole, Monterey, Calif.
- Kelvin, P. (1973): A social-psychological examination of privacy. British Journal of Sociology & Clinical Psychology, 12, 248-261.
- Laufer, R. S. & Wolfe, M. (1977): Privacy as a concept and a social issue: A multi-dimensional developmental theory. Journal of Social Issues, 33, 22-44.
- Marshall, N. J. (1972): Privacy and Environment. Human Ecology, 1, 93-110.
- Pedersen, M. D. (1979): Dimensions of privacy preferences. Multivariate Behavioral Research, 9, 255-272.
- Westin, A. F. (1967): Privacy and Freedom. Atheneum, New York.
- 吉田圭吾&溝上慎一(1994): Privacy志向性尺度の検討. 日本心理学会第58回大会.

